

# 今何をなすべきか

(阪神淡路大震災)

(第七号平成十二年二月一号掲載)

幹候十三期 加藤武彦

平成七年一月七日兵庫県知事からの災害派遣要請がないままに護衛艦・輸送艦に行動を命じたこと、十八日上空及び陸上から災害の状況を視察して、災害派遣部隊指揮所を呉から阪神に移そうと決心したこと、十九日ヘリコプター六機により、二十四名の幕僚を連れて泥沼のグラウンドに降り立ったこと、被災者でもある阪神基地隊の隊員の心情を思う時「苦勞をかけるな」と思いつつも、「阪神基地隊の今後のことを思えば、ここで指揮を執り続ける他はない」と決心したこと等を、四年余りたった今でも鮮やかに覚えております。

以後四月二十七日兵庫県知事の要請により、災害派遣部隊を撤収するまで災害派遣活動を続けました。幸いにもこの間、海上自衛隊災害派遣部隊は表の通り実績を残すことができました。

この実績をどう評価したかは神戸市民等、兵庫県民の方々です。しかしながら海上自衛隊は最善を尽くしたと自負致しております。

海上自衛隊の隊員達は本当によくやって

くれました。彼らの使命感、責任感と献身によって海上自衛隊の名誉は保たれたと確信しております。

災害派遣部隊指揮官であった私は、四十日を超えて阪神基地隊において部隊の指揮を執った訳ですが、未曾有の大被害の復旧作業に部隊を投入し、地方自治体との連絡、意志疎通もままならない状況で、ほとんどすべてを自らの責任で判断し、活動が続けなければなりません。海上自衛隊に寄せられる多くの期待と要求、現場から遠く離れた海幕との認識のギャップ、マスコミの取材、被災部隊である阪基隊員の心情、ヘリコプターの運航、艦艇の交代計画、地方自治体行政の説得等々、多くの案件を当時の阪基司令仲摩海将補の補佐を受け、幕僚を叱咤激励し、ひとつひとつ解決していった訳です。

このような情勢下、いかに冷静に海上自衛隊の任務を完遂するか、そして全自衛隊の任務達成に貢献するかは、そう簡単なことではありませんでした。

「艦艇を全面開放して被災者を収容しろ」

(被災者に給水するためには大阪港まで頻繁に往復させなければ真水は市民に届かない。困るのは被災者全体。)

出動人員 (延)	約254,600人
出動艦艇 (延)	679隻
出動航空機 (延)	1,639機
出動車両 (延)	894両
救助した生存者	8名
収容した御遺体	17体
給水量	25,006トン
非常用糧食	約150,500食
提供した毛布	8,300枚
市民への入浴支援	15,790人
休息した陸自隊員	約18,000名
宿泊した陸自隊員	約12,000名

「艦艇を使ってフェリー運航をやれ」

(災害の中から、フェリー全社が、独自で運航に立ち上がっているではないか、無償で艦艇を提供することは市民の力による復興を妨げることになるのではないか。)

「ポートアイランドにも水運べ」

(東灘区、中央区に比して優先度はどちらか。ポートアイランドに艦をまわせば両区への配給は減らさざるを得ない。)

「海上自衛隊は神戸で何をしているのか、テレビにも報道されていない。」

(港まで来て下さい。)

等々、色々な注文が各部からありました。

(「水交」4月号につづく)